

【学位論文審査の要旨】

本研究は韓国ソウル市における屋上緑化と都市農業がもつそれぞれの問題に焦点を当てた。屋上緑化は都心における緑地不足を人工的な緑化事業によって解消するものであったが、その持続的な管理には多くの課題が生じている。それらの課題の解法として、都市農業のコミュニティが屋上緑化の活動に積極的に取り入れられた。とりわけ、本研究は都市農業における公共性の役割に着目し、都市農業がいかにして屋上緑化の有効な管理手法になったかを明らかにした。同時に、そのような都市農業のコミュニティは日常的なものとして定着し、社会的および空間的なネットワークとして拡張していった。本研究は、それを緑ネットワークとして定義し、その構築の仕組みを明らかにすることを最終的な目的とした。

本研究が事例とした文来屋上菜園では、運営構成員が当初の企画段階から議論に参加し、菜園空間の利用に互いの能力を発揮しながら自発的に活動していた。さらに、構成員は屋上菜園を拠点とし、地域住民とともに文化的なイベントを日常的に多く催してきた。したがって、都市農業は農空間における緑化と耕作活動の枠組みを越えて、芸術家・町工場・地域住民の多様な住民属性が交流する新たな公共空間づくりの場として位置づけられるようになった。このような過程のなかで、屋上菜園を介在して構築された都市農業のコミュニティは、日常的なコミュニティに発展した。また、文来屋上菜園の構成員たちは活動の場を他地域や他分野に拡大させてきた。加えて、菜園の指導員は多くの地域で屋上菜園づくりを手助けするようにもなった。このように、屋上菜園の経験から育まれた人材は活動の場や輪を広げ、人的な緑のネットワークの構築に貢献するようになった。

以上の分析結果に基づいて、私的空間の屋上をどのようにして公共性を創出していくのかを最終的に検証した。本研究は、公共空間の形成に関する性格を検証するため、物理的な性質から近接性、開放性、地域性、快適性の4つの指標を、非物理的な性質から共同体性、主体性、協力性の3つの指標を抽出した。これらの指標を文来屋上菜園の研究に適用し、以下の3つの結論を導き出した。

第1に、屋上緑化の持続的な管理には、屋上の閉鎖性や近接性、および便益施設の未整備など、公共空間の物理的な性質が大きく関係していた。文来屋上菜園では物理的な指標に関する満足度が低く、これを向上させるための取り組みとして開放性と地域性が複合的に活用された。具体的には、菜園の運営側が地域住民に屋上を開放し、定期的なイベントの開催によって屋上の閉鎖性を克服し、屋上空間を地域に密着した空間に変えた。つまり、屋上菜園は公共性をもつようになり、コミュニティの形成に有効に機能するようになった。

第2に、屋上菜園を基盤に形成されたコミュニティは、屋上の利用だけにとどまらず、広域的な活動に展開し、新たなコミュニティ形成の契機になった。そこでは、物理的な指標の開放性や地域性、非物理的な指標の主体性と協力性が関連し、それらの指標が相互補完し合うことによりコミュニティの拡大が促進されてきた。

第3に、菜園の運営が特定のリーダーに依存していないため、それぞれの構成員は非物

理的な指標の協力性と共同体性で性格づけられてきた。これは、屋上菜園がコミュニティの内部結束の核となることと、その共同体性が日常的なコミュニティ形成に重要な役割を果たすことを示している。

本研究の最終的な結論は、コミュニティ形成に不利であった屋上菜園が、都市農業によって公共性を創出し、日常的なコミュニティの形成に貢献したことである。そこでは、屋上菜園に関連した物理的性質と非物理的性質の組み合わせが作用し、その作用が相乗的に、そして補完的になるにつれて、私的空間は公共空間の性質に変化し、それがコミュニティ形成につながった。つまり、都市農業の日常的なコミュニティが拡大し、緑のネットワークの構築の素地がつくられた。かくして、文来屋上菜園は屋上空間と人的ネットワークの結合により緑を持続的に拡散してきたといえる。

以上に述べてきたように、本研究の新たな知見は、都市緑化における都市農業の役割を明確にただけでなく、都市農業のもつコミュニティ形成力を私的空間から公共空間への変化から明らかにしたことである。さらに、公共空間の開放性に基づく、人的ネットワークの構築が、都市緑化のネットワークにつながることも明らかにした。つまり、本研究の最終的な結論は、都市住民の余暇空間やレクリエーション空間としての緑地の創成メカニズムを明らかにするものであり、都市域における余暇空間やレクリエーション空間の社会的持続性を構築することにも貢献できる。したがって、本論文は観光科学研究の発展に寄与するだけでなく、博士（観光科学）の学位授与に十分値するものと判断できる。